
モノクロ

宮琵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ

【著者】

Z4956Z

【作者名】

富麗

【あらすじ】

中世ヨーロッパを目指しました。

恋愛ではありますけれど、ハッピーエンドとは無縁でほぼ遠いです。

あるところ、小さな国がありました
小さな国で貧富の差はそれは大きく差がありました

あるところ、二人の男女がいました

貧富の差により男女には大きな壁がありました

男は小さな国の有力な権力者の跡継ぎで教養もありました
ですが

女の方は貧乏のどん底にいました

金のためなら女はなんでもやるような冷酷非道でした

男の、小さい時のクリスマスは暖かな家で綺麗な服で
大きな七面鳥とクリスマスパーティングにスープをおなか一杯食べ、
そして抱えきれない何個ものプレゼントを親戚や親からもらいそれは
はそれは幸せなクリスマスでした

大きなベットに大好きなおもちゃ 新しいブーツに服

男の小さな時はその少年の年なら欲しがるものは全て持っていました

女の、小さい時のクリスマスは地面凍る雪が降り積もりゴミが山積
みになる汚い路地裏で、追剥の服で

行き倒れになつた死んだ者の服などをくすねていました

おなかも空き店から何個ものパンを盗み追いかかれても逃げて暖
かい家の団らんの様子を睨んでいました

女は家族も親戚もいないのです

男は日曜日教会へミサに行くときに女と出会いました

女は美しく育ちましたが身なりはとても見ず簿らしかったのです

男は見惚れました ですが女は睨みました

女は男のような家が自分たちのような貧乏人を見捨てていると思つていました

男はこののような美しくて見ず簿らしい女は初めて見ました
女はこのように憎くて綺麗な装束をしている男を初めて見ました

男は仕事を覚えるために外国語や勉強をさらに今まで以上に難しくしました

そして男は周りからも「天才」や「格が上」など誰からも称賛されました

女は体も売り生きるためだけにたくさん罪も犯しました たくさん盗みもしました

そして女は周りからは「愚か」や「娼婦」など道行く人に虐げられました

ある日男は違う日曜日のミサの帰り、道行く女に話しかけました
「どうしてそんな身なりなのか」と。

女は笑いそしてすぐにすごい剣幕で男を睨みました
「好きでこんな生き様をしていると思つのか」と。

男は驚きました。

男の付添人は鞭を手に取りました

「殺すのなら、殺せよ。殺してくれよ。その方がもう楽だ。」

女は笑いながら言いました

それで男の付添人は鞭を振り上げましたが男はそれを止めました
女は今にも食つて掛かりそうな形相で男を睨みました
男は対象的に微笑みました

「名前は？」

「同情するつもりか」

「僕：いや俺は、同情なんて一切してことがない」

男は笑い続ける

女は舌打ちする

「名前は？俺は、シユバルツ」

「フン、名前など、無い。」

「ない？」

女は名前を与えられる前に親に捨てられたので名前など無いのです
抱かれ名前はその場でつけられる字名のようなものでした
自分に名前はない。それは存在していないを指しているものだと思つていました

「なら、俺が付けてやる。その代りに隣にいてくれないか？」
「は？」

女は驚きました

今までそんなこと言われたことが一度もないのです
追剥をし、抱かれて金をもらつたらすぐに突き放される
なのに名前を聞き、無いならつけて隣にいてほしい？
なんと可笑しな男か。

「お前の口は節穴なのか。お前みたいな男はどうぞのお嬢様とか言
われる方がいい。馬鹿か。」
「関係ない。俺が惚れたのは、少なからずお前だ。名前はビアンコ・
カンドーレ、だ。」
「ビアンコ・カンドーレ…。」

女は何回も呟きました。

「異国の言葉で曇りなき純粋な純白といつ意味だ。だがそのままではな…。そうだ。ビアンコをビアンカに変えよ。」

「…。」

女は不思議そうな目で男を見ました。男は整った綺麗な顔を笑わせてもう一度言いました

「ビアンカ・カンドーレ。俺の隣にいないか。」

「お前の思うようなきれいな人間ではない。そして名前の意味もまたたく違つ。白と、いうより光さえもない黒の方が私には似合つてゐる。」

女は俯きました

男は顔を上げさせました

「黒はどちらだらうな。」

そうして女を連れて帰りその日のうちに女は見るも美しいそのお嬢様よりも美しい娘となりました。

でも、女は怪訝そうな顔

ドレスも綺麗な髪飾りも身に着けたことがなかつたからです。頭に飾られているリボンもうつとおじく重く感じられるのです

「邪魔だ」

「でもとてもきれいだ」

女は…いえ、ビアンカは少し笑いました

シュバルツはビアンカをこの時愛してしまいました。シュバルツはビアンカの白い手袋がつけられている右手を優しく取りました、そうして大広間へ連れて行き食事をさせました

女はがつつくともなく食べよつとはせずただじつと見つめていました

「どうして？」

「え？」

「ここまで見ず知らずで初めて喋る女にここまで優しく…優しくす

るのはなぜだ？私を殺しても誘拐しても手に入るものは何もない、
有り金も高価なものも何一つない。

「ビアンカに言つたら殴られそうだけれど、俺、いや僕がそんな金
に困つてゐるよう見えるかい？」

「そうだな…困つていたらこんな服、とつて売つてゐるだろ？な。

」

ビアンカは笑いました。

ビアンカも自分の心情に驚きつつありました。

今まで、優しくしてくれて隣にいる、そして名前を付けてくれた
人。

だからこそ、どうしてだかが分からなかつたのです

「でも一層分からない。何故、私を、誘拐した？」

「誘拐だなんてとんでもない。」

「だつて…。そうだろ？連れ来て手に入るのは私そのものだけだ。

」

「だつて僕は君が欲しかつたから。」

「体が？」

ビアンカは笑いました。微笑みではなく、挑発的な笑顔。

対してシユバルツは真顔になりました。ビアンカは挑発的な笑顔を
止めません。大広間に冷たい空気が広がるのを感じました。使用者
も追い払い誰もいない大広間で大きな机に豪華な食事。でも、手は
付けられることもなく冷めてきているようにも思えますが、それよ
りもまずシユバルツの心情が第一でした。

「僕は、女に不自由してはいない。」

「…ああ、その顔と財産を見れば一発でわかる。」

「でも、愛には不自由している。」

「…哲学的なことを語りうるのだな。」

シュバルツはふつと嘲笑するように顔を緩めましたがビアンカは泣いているようにも思えました

「僕に言い寄るのは金田当て、顔が目的と言つのが多いんだ。」「ほう、顔が目的だなんて素晴らしい。」「どこが。」

二人とも笑いました。冷たい笑いです。

少し間を置いてシュバルツは続けました。

「愛したのは、外見と金。僕自身の、中身ではない。」
外見。ビアンカは結構な自信家なのだな、と思つたがシュバルツの顔からしてどうやらそれは深刻らしい。

「言つておくけれど外見と金目的の話は使用人から聞いた。

むつと顔をしかめたのがビアンカは面白く感じました

「そうか？わたしは相当な自信家だ、と思つたのだが。」「シュバルツは益々不機嫌な顔をしました。ビアンカは少しやりすぎたか、と思いました。

「僕は、ただ僕自身を愛してくれる女性を探していた。」

「わたしがあなたを愛す…とでも？何か大きな勘違いをしていないか。わたしは今まで、そう、お金のためなら何でもやつて見せた。今だつてお金目的かもしれないのだぞ。それなのにあなたはそう言えるのか？」

「いや、きっとビアンカ。君なら僕を愛してくれる。君は自分でいう程ひどい人間ではない。」

ビアンカはため息をついてマナーも無視し、適当に銀で美しいフォークを手に取り近場にあつたケーキを刺して食べ始めました。
それを静かにシュバルツは見ていました。ビアンカは今にも泣きそうな顔でした。

「どうして…わかる。」

「わかるからさ。だから僕は純粋純由と言ひ合を付けた。」

シュバルツは立ち上がりビアンカのところに行きました。ビアンカはフォークと置きシュバルツを見上げました。

優しく頬に手を添え、シュバルツはビアンカの右頬にキスをしました。一つですが優しく、温かいキス。シュバルツはビアンカを見て驚きました。泣いていたのです。… そう、彼女は生きてきて今まで一度もキスも優しい言葉も… 貰えなかつたのです。ですから生まれて初めてもらつたキスと優しい言葉が胸に響き心が満たされる気がしたのです。

盗んだパンを食べた時、高価なものを盗んだとき。

その時は確かにうれしかつたのですがどこか心の中、痛く苦しく、満足するものはありませんでした

ですが今は、違いました

全てが

ビアンカは泣きました。シュバルツはただ優しく抱きしめているだけでした。

そして二人は結婚したのです。

ですが、二人の結婚を反対するものはそれはたくさんいました

最初から恵まれた結婚ではないことは二人とも知っていました
ですが、二人は幸せでした

二人とも本当に心から愛し合っていたのですから

ですが

その幸せを妬み、壊そうとする者は当然いました

そうでしょう。

身分も最下層で血縁は誰一人とおりず、外見以外は教養も何もない
のですから。

前篇（後書き）

後編も頑張ります！
駄文ですね…。はい、わかります。よくわかります…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4956z/>

モノクロ

2011年12月16日21時45分発行